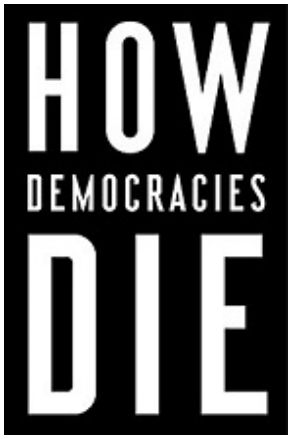

How Democracies Die

Steven Levitsky and Daniel Ziblatt
New York: Crown, 2018. pp.312.
ISBN 978-0-525-57453-8

2016 年アメリカ合衆国大統領選挙におけるドナルド・トランプの勝利。この選挙結果は、民主主義の後退に危機感を持つ在米政治学者たちに、学術論文だけでなく一般読者向けの書籍も執筆することを促している。そして、アダム・プシェヴォルスキの *Why Bother with Elections?*とならび、その代表例として挙げられるのが本書である。

ラテンアメリカ政治研究者のスティーブン・レヴィツキーとヨーロッパ政治研究者のダニエル・ジブラットによる本書は、10 の章で構成されている。まず序章では、近年はクーデターではなく選挙によって選出されたリーダーが徐々に民主主義を崩壊させるパターンが増えており、アメリカもそのパターンを踏襲しないよう他国の事例から学ぶことを目指すという本書の目的が示される。そして、第 1 章～第 3 章では「権威主義的」な政治家による権力掌握が扱われ、扇動政治家を排除するという政党の機能が弱まったために権威主義的な要素を持つトランプが大統領の座に就いたことが述べられる。一方、第 4 章～第 8 章では制度や規範が焦点となり、近年のアメリカでは「相互寛容」と「制度的自制」が弱まり、トランプ自身もそのような規範やチェック・アンド・バランスに対して敵対的な姿勢を示していることが考察される。そして、最後の第 9 章では今後のアメリカでは二極化がさらに進むことが予想され、民主主義の維持のためにはそれに対抗する「民主主義擁護連合」が必要であると論じられている。

本書はアメリカの一般読者を想定して執筆されているため、記述の大半はアメリカ政治に関するものである。しかし、他国の事例としてベネズエラやペルーといったラテンアメリカ諸国も頻繁に取り上げられており、他国を研究することが自国に対する理解の促進につながることを上手く表現しているという意味においても、ラテンアメリカ政治研究者にとって必読の書であるといえよう。民主主義の後退は、近年の比較政治学で最も注目を集めているトピックの一つであり、紹介者も川中豪編『後退する民主主義、強化される権威主義―最良の政治制度とは何か―』（ミネルヴァ書房）の一章を執筆している。本書と併せてご覧いただければ幸いである。

菊池啓一（きくち・ひろかず／アジア経済研究所）